僕のおばあちゃん。

澤田しずく

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
僕のおばあちゃん。

【Ｎコード】
Ｎ１４３６Ｖ

【作者名】
澤田しずく

【あらすじ】
台風の日、僕が、老人ホームに入所するおばあちゃんに会いに行った話。

ごうごうと風が吹き荒れている。
駐車場から玄関までの短い距離を歩いただけなのに、傘を一本だめにしてしまった。

「おばあちゃん、久しぶり」
個室のドアを開けると、介護用ベッドに伏したおばあちゃんがいる。
小柄で、しおしおで、やせ細った、僕のおばあちゃん。

おばあちゃんは老人ホームに入所している。
いわゆる寝たきり、ではないけれど、いろいろあって僕の家でも親戚の家でも、介護が難しいのだ。
なんでもこういうところに入るには、けっこうな大金が必要らしく、僕もそれなりにカンパさせていただいたが、
そこまでしてでも、うちの親戚連中は、介護が必要なおばあちゃんを家に置いておきたくないようだ。
忙しい忙しいと仕事を言い訳にする、僕も含めて。

おばあちゃんの口癖は、「あたしゃもう百歳になるのよ」。

本当は今年で９４歳なんだけど。

「あんた、こんな日にこなくても」
おばあちゃんは骨ばった手で布団をはねのける。

「いいんだよ、今日ぐらいしか休みがないんだから」
台風が何だというのだ。
僕は花瓶の花と水を入れ替える。くすんだ白い百合を、ベッドの横のゴミ箱に捨てる。
今日の花は、おばあちゃんの笑顔のような、ひまわり。

カーテンを開けて、とおばあちゃんは言う。
僕は、はいはい、と言いながら、花柄のカーテンを開ける。

カーテンを開けたからって、部屋が明るくなるわけではないのだ。
空はどんより、雨もちらついている。

窓から見える木々は、左右に激しくスイングしている。

「台風が来てんだねえ…怖いなあ。
あたしゃ死ぬのは怖くないんだけど、台風はどうも好かないねえ」

ベッドに目をやると、おばあちゃんはいつも以上に小さくちぢこまっていた。
「おばあちゃんは、台風は怖いのに、死ぬのは怖くないの？」

おばあちゃんはこっくりとうなずく。
「そうだよ。大地は怖いの？」
おばあちゃんは年相応の認知症が進んではいるが、幸いなことにときどき顔を出す僕の名前は覚えてくれている。

「そりゃあまあ…台風で家が壊れたり誰かが死ぬのは怖いかなあ」
「そうじゃなくて、死ぬこと」
すぐには答えられなかった。
黙って、逃げようとして、窓を見つめていると、おばあちゃんはつぶやいた。

「あたしゃ、台風で誰かの大切なものが壊れるのは怖い。
でも、死ぬのは怖くない。
あたしゃもう百歳まで生きたんだもの。」

おばあちゃんはいつも、顔をしわくちゃにして笑う。

「安心して、みんな行き着くところは同じだから」

そうだね。

しばらく外を見つめた後、僕はカーテンを閉めた。

もう一度ベッドに目をやると、おばあちゃんはすうすうと寝息を立てていた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1436v/

僕のおばあちゃん。

2011年10月9日11時56分発行